

ブックカフェという「場」における読書会について  
— 地域における読書振興活動の観点から —

依岡隆児・星野凜

Der Versuch über die Möglichkeit des Lesezirkels im  
,Büchercafé‘ — in dem Augenblick der Leseförderung  
in der lokalen Stadt —

Ryuji YORIOKA, Rin HOSHINO

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 28 卷 別刷 2020 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*  
*The Faculty of Integrated Arts and Sciences*  
*Tokushima University*  
Volume XXVIII, December 2020



ブックカフェという「場」における読書会について

—地域における読書振興活動の観点から—

依岡隆児<sup>1</sup>・星野凜<sup>2</sup>

Der Versuch über die Möglichkeit des Lesezirkels im  
,Büchercafé‘ — in dem Augenblick der Leseförderung  
in der lokalen Stadt —

Ryuji YORIOKA・Rin HOSHINO

#### Abstract

Hier wird über die Möglichkeit des Lesezirkels in der japanischen lokalen Stadt nachgedacht, um die Lesekultur gut anwachsen zu lassen. Indem ich die deutschen und japanischen Fälle von Leseförderung vergleiche, will ich die Veranstaltung des Lesezirkels im ,Büchercafé‘ als gültig schätzen. Zugleich versuche ich klarzumachen, wie wichtig dazu die Orte wie öffentliche ,Plätze‘ sind, wie vielseitig sich dort die

---

<sup>1</sup> 徳島大学社会産業理工学研究部教授

<sup>2</sup> 徳島大学総合科学教育部博士後期課程地域科学専攻

Aktivitäten mit verschiedenen Menschen entwickeln, und wie man die Möglichkeit der Lesekultur erweitert, die solche Aktivitäten sozial-offen machen könnte.

## 1、はじめに

読書会への関心は近年高まっている。ただそれは、従来の高齢者中心に公民館やセミナー室などで行うものや子どもへの読み聞かせ会などとは異なり、不特定の人が集う場として比較的若い層（20～40代）の人々が参加するものが注目されているからだ。こうした読書会は欧米で盛んな、参加者の自宅持ち回りで開催する読書会とも異なり、たとえば、通勤前の30分を駅前の喫茶店で開催される朝読会<sup>3</sup>や定期的に課題図書型読書会を行う日本最大の読書会である猫町倶楽部<sup>4</sup>などが知られている。

日本におけるこうした新しいタイプの読書会については、雑誌や新聞でも取り上げられてきたが、町づくりのコミュニティ作り、あるいは自己啓発的セミナーとして捉えられがちだった。そのため、運営の仕方や持続的なやり方、参加者の属性や人集め・広報の仕方といったことが議論される傾向があり、読書会を行う「場」という点は軽視されがちだ。読書コミュニティ作りの実践報告や事例報告はあるが、学校・大学や図書館での事例が多く、町なかという地域に根差した活動についてはあまり報告されていない<sup>5</sup>。また上述の猫町倶楽部は当初は名古屋市のカフェで行われていたが、規模が大きくなり開催場所が分散し、固定できなくなっているし、コミュニティを活気づけるサードプレイス

<sup>3</sup> 「読書朝食会 Reading-Lab」『週刊 東洋経済』1月22日号、2011年。

<sup>4</sup> 山本多津也『読書会入門～人が本で交わる場所』幻冬舎、2019年

<sup>5</sup> たとえば、津田紗希子「子どもの読書を支える総合的な図書館行政—恵庭市『読書コミュニティのまち』を事例として—」（『公教育システム研究』第13号2014年）は、行政学的見地からみた子どもの読書活動を支える図書館の事例報告である。宮澤優弥「ビブリオバトルから読書コミュニティをつくる：三年間の実践から見えた展望と課題」（『人文科教育研究』第44巻、2017年）では、中学校の生徒を対象にビブリオバトルを教材とした授業実践による読書コミュニティ作りが報告されている。また、大学の実践例としては、田中梓、菅原しおり、山本順也、鈴木宏子「一橋大学附属図書館における新たな読書推進活動：他機関・学生と連携したブックトークの実施報告」（『一橋大学図書館研究開発室年報』第3号、2015年）があるが、大学附属図書館における学生と連携した読書推進活動の報告となっている。ちなみに、2020年9～11月に、ジュンク堂書店大阪茶屋町店で「『読書』と『場所』のあいだ」企画展示（阿久津隆『本を読める場所を求めて』出版記念）が開催されたように、出版・書籍業界では学校・図書館以外の読書の「場」に注目する向きも出てきている。

を目指す「本のカフェ」も札幌と東京のカフェで行うことになっているが開催場所は固定していない<sup>6</sup>。

読書会が行われる場としては図書館や公民館、セミナーハウス、カフェといった場が一般的である<sup>7</sup>。だが一方で、カフェと書店が合体したブックカフェ、とりわけ書店主体型ではないブックカフェは読書会との親和性が強く、本好きな人が集まる場となる可能性を秘めている。本や本好きな人々の集まる場所としての魅力を持ち、地域において読書の輪を広げることにもなりうるし、カフェを経営する側にも安定した顧客の獲得やブランド力の強化など大きなメリットとなる。読書会を主催する側にとっても場の設営などの点で店の協力が得られるので、負担が少ない。他方、問題点としては、経費（場所代）や他の客の存在、長時間の開催の困難さ、予約のとりにくさなどがある。

そこで本論では、読書会を本の閲覧のみのブックカフェで行うことについて、地域における読書振興という観点の事例としてウィアードカフェという徳島のブックカフェを取り上げ、以上のような利点と問題点について考察し、読書会を地域における読書振興のための場として展開することの可能性を検討してみたい。筆者が主宰するまちライブラリー・ビブリオラボとくしまがここで月一回開催する読書会の記録をもとに、読書会開催の状況と読書会参加者の属性、年齢層、動機、満足度、参加頻度などを検討し、読書会活動と読書振興にとっての場の重要性を明らかにする。安定的な会員制の読書会と異なり、そうした活動はある種の不安定さにさらされるが、一方で流動性や多様性が魅力となりオープンな場、ひいては公共的な空間にもなりうる。こうした点についてもサードプレイス論の「公共的な中核的空間」<sup>8</sup>をふまえながら考察を加える。

本論では以下、まず読書や文学を振興する場としての重要性を19～20世紀に

---

<sup>6</sup> 若林隆久「読書会による地域コミュニティの再生—読書会『本のカフェ』の事例から」高崎経済大学地域科学研究所紀要『産業研究』第52巻第1号

<sup>7</sup> 『全国読書グループ総覧 2018年度』（公益社団法人読書推進運動協議会、2020年）によると、公益団体法人読書推進運動協議会は都道府県の中央図書館を中心に結成された各地の読書推進運動協議会と協力のもと活動してきたものであるため、「読書グループ」とされるものの多くは「主たる活動場所」として、図書館やコミュニティーセンター、小学校、福祉施設を挙げている。種分けは「子どもの本」グループと「一般の本グループ」で、活動内容は、前者は「実演」という子どもを対象とした読み聞かせ・朗読で、後者は高齢者中心の研究会や読書支援、環境整備などである。「読書会」と「読書グループ」といういい方の違いはあるが、現在のいわゆる「読書会」のイメージはこうした各地の図書館中心の活動に由来していることが推察される。

<sup>8</sup> レイ・オルデンバーグ『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房、2013年

おけるヨーロッパの文学カフェと第2次世界大戦後の文学者グループの事例や現代ドイツの読書振興の試み、さらに現代の日本における読書の「広場」を作る実践を紹介する。次に、読書会のあり方に焦点を絞って、筆者が関わるブックカフェ（ウィアードカフェ）での読書会実践について考察する。結論として、サードプレイスの意味でもブックカフェにおける読書会は意味があり、地域において魅力的で、かつ読書振興にもつながるクリエイティブな場づくりにつながる可能性を秘めていることを明らかにしたい。

## 2、読書や文学振興の場について～ドイツの事例を中心に

ここではまず、ドイツの事例や日本国内の試みを紹介しながら、読書振興のための場の重要性について考察してみる。

新しいアイデアや創造性を生み出すために現代において必要なのは、閉鎖的な同好の士の集いでもマニュアル化された自己啓発セミナーでもない、異種な出会いであり、それまでの自分を越えた可能性に開かれた場である。それは自ずと偶発的で、かつ恒常的な場であるはずだ。ただ、従来のクリエイティブ都市論は、専らニューヨークやロンドン、パリ、東京といった大都市を対象として、そこでは資源の集中によって生じる生産優位性や、規模の経済、知識の横溢が見込めるからこそ、クリエイティブな人々とクリエイティブな企業は特定の地域に集中すると論じたが<sup>9</sup>、では地方の中規模都市ではそうしたクリエイティブな場はのぞめないのだろうか<sup>10</sup>。

本章では、まず文学・読書による交流・振興の場という観点からドイツの事例から考察する。19世紀後半から20世紀前半のヨーロッパにおけるカフェ文化の隆盛は、読書振興という意味で、参考になる。フランス・パリの作家や画家たちが毎夜集うカフェから新しい文芸・芸術潮流が生じ、特に20世紀の20年代のベルリンではカフェ通いの文学者や出版者たちの間でさまざまな出会い

<sup>9</sup> リチャード・フロリダ『クリエイティブ都市論～創造性は居心地のよい場所を求める』ダイヤモンド社、2009年

<sup>10</sup> これに関して筆者はすでに、地方都市における読書コミュニケーション育成とそのネットワーク作りについて、自らが関わったプロジェクトについて報告したが、ここでは地方都市においても、大学を中心にした読書によるコミュニティとネットワークの可能性を示唆している。依岡隆児編著「第3回読書懇談会『徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト』の報告～徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト『徳島における読書コミュニケーション育成とネットワーク作りプロジェクト』より～」2019年。参照、徳島大学機関リポジトリ：

<https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/ja/search/p/72/item/113461>

を生み、つながりを築いた<sup>11</sup>。こうしたカフェ的な場の存在は、町づくりやコミュニティ作りという側面だけでなく、文芸運動を醸成する役割を果たしてもいたのである。人間関係における風通しのよさとフラットさが新しい才能を育て、異質な者たちがそこに新しい風を吹かせていた。やがてこうした場はすたれていったが、戦後も場の共有と多彩な才能の集合ということが文芸・文化の涵養において大切であることに変わりはない。それでは、現代においていかにしてこうした場は作り出せるのだろうか。

たとえばドイツでは戦後、47年グループという文学者グループが生まれ、新人作家の登竜門の役割を果たした。これは年に数回、西ドイツの各地に泊りがけで作家・出版関係者たちが集まり、開催した会である<sup>12</sup>。文学の移動式首都と言われ、文学コミュニティを場所に限定されないものとした点で評価できるが、参加者が主催者による招待で決まるという個人的なつながりを基本とするもので、一般性・公共性を目指すものではなかった。これは、文学エリートたちの閉じたグループだったといえる。

それに対して、ベルリンのザヴィーニープラッツにある「作家たちの本屋 Autorenbuchhandlung」は、作家たちが集まり、朗読会やトークを開催しながら文学の場として現在も機能している。併設するカフェはブックカフェで、展示スペースとしても利用され、二週間に一度イベントを開いている。1976年の開店に際しては、47年グループの主要メンバーだったハインリッヒ・ベルやギュンター・グラスら著名な作家が集まった。1960～70年代には戦後を代表する作家たちが西ベルリンに居を移したこともこの背景にはある。グラスはこの書店について、その文学的側面のみならず商売の面の如才なさを強調している。店のホームページには、「単に楽しみだけのものではなかった。出版の自立を文学の分野において実現させようとしていた。時事的出来事が議論され、作家たちや出版社、雑誌のポートレートが展示された。ラジオドラマのタペ。そしていつも朗読会があった」とある。また、「読書とは流行現象ではなく、ひとつの姿勢である」として、実際、昼は書店として活発な出会いの場所となり、夜はイベントを開催している。<sup>13</sup>

このように、「作家たちの本屋」は文化的存在意義を持ちつつ商業的にも持

<sup>11</sup> ユルゲン・シュベラ『ベルリン・カフェー黄金の1920年代』大修館書店、2000年

<sup>12</sup> ハンス・ヴェルナー・リヒター『廃墟のドイツ1947：47年グループ銘々伝』河出書房新社、2015年

<sup>13</sup> <https://ja-jp.facebook.com/autorenbuchhandlung.savignyplatz/> 最終閲覧日2020年11月19日

続できる工夫を行っている。文化的な議論や出会いが生まれる場を作り、読書を一過性のブームとしてではなく維持されるべき「姿勢」としてとらえている。その意味で現代の文学・読書振興の一つの成功例と言えるだろう。

同じくドイツの読書推進活動としては、Stadtlesen（シティリーディング）の試みもユニークだ。2009年からドイツ、イタリア、オーストリア、スイスで毎年開催されている野外での読書祭で、オーストリアのユネスコ委員会の後援を受けていて、読書の楽しみを広めることで読書を促進することを目的としている。町の広場に読書用の家具や本棚を設置し、125社の協賛出版社から寄贈された3千～5千冊の本を配架する。入場料無料で閲覧やその場での読書ができる。そのためにハンモックやビーズクッションも置いている。提唱者であるゼバスチャン・メットラーの「読書とは頭の中の世界だ！」という言葉が、この活動のキャッチフレーズになっている。ドイツ大統領からもメッセージが寄せられている。2020年にはドイツ、オーストリア、スイスの258都市がノミネートされて、28都市が「シティリーディング」に選出され、活動を展開した。

14

このようにStadtlesen（シティリーディング）は、定期的にドイツを中心に各地から選抜した都市で、広場や公園といった町中に本棚を設置して、市民たちにここで読書をさせるといったイベントである。関連してブックトークや朗読会・読み聞かせも行われるが、メインは市民たちが本棚から本を実際に持ち出し、クッションや椅子に腰掛けてしばらくの間読書をするのである。読書を広場という公共の場において開放し、子どもからお年寄りまで世代を超えて参加できるようにしている。人目に触れる場で行われるので、他の市民への読書啓発という意味もあるだろう。出版社もスポンサーとなって本を提供している。だがその一方で、そこで参加者同士の交流が生まれたかは疑問である。開催都市と期間が限定的であるため、恒常的な取り組みとしても不十分である。

Stadtlesenのアイデアにおいて「広場」を舞台にしたことはヨーロッパ的であるが、このことは日本にとっても示唆に富む。もっとも、日本では広場というより神社や寺、市場がそうした役割を果たしていたのかもしれない。広場の特徴は交通の要所であることと、何もないということだ。そこには、町の中にあえて「空」を作り出すという街づくりの知恵があった。公共の場であり、誰にでもどんなことでもできる自由がある。これは、日本文化での「空虚」の発

---

14 <https://www.stadtlesen.com/> 最終閲覧日 2020年11月19日



想にも通じる<sup>15</sup>。「空虚」とは特定の目的に限定されず、様々な使途・目的に開かれ、可能性を秘めた場である。仕事や家庭で目的に即した行動を強いられる現代人には、特に目的もない行動は否定的にみられ、暇とか余暇といつて不当に貶められることもある。だが、人間にとって活動はいつも目的に即しているわけではない。仕事や研究において目的遂行を強いられているが、そのあまり余暇においても目的のために動くという本末転倒なことにもなりかねない。

空間だけでなく時間にもこのことは当てはまる。カフェタイムという時間の存在も同様に貴重である。仕事の気分転換という意味だけでなく、「空」になる時間は大切である。そこでひとは生活の気分も整理することができる。

それゆえ、特に目的や時間にしばられることのない場とは一種の「広場」のような所でもある。欧米ではこの広場が町の中心にあって、異質なものと異質な人と出会い、外の世界と交わる交易・交流の場であり、また憩いの場所ともなっている。中心に「空」があるというのは都市の成立においてはある意味で常識なのかもしれない。ところが、日本では特に戦後、この「空」を置くという余裕がなくなり、中心にかえって過密状態を生み出してしまった。ショッピングモールに広場を設けることはあるが、公共的なものとはいえない。公園も中途半端な位置づけである。

一方で、公共図書館が「広場」とされる事例も出てきた<sup>16</sup>。日本でも、猪谷知香『つながる図書館』によると図書館を中心にした街の中心に立てた複合施設・武蔵野プレイスについて、設計を担当した kwhg アーキテクトが「武蔵野プレイスでめざしていたのは、ひとことでいえば『市民の居場所』です。なぜかいつも人が集まっている広場のような場所を建築の力によって作り出そうと考えていました」<sup>17</sup>と述べているとする。このように、武蔵野プレイスでは、人が集まる町の中心地に「市民の居場所」を作り、「広場」のような場所を作り出そうという意図が建築設計者側にあった。こうした中心にあえて「空」なる空間を置くというのは、市場原理に反するために行政の力と市民の合意がなくてはできないだろうが、地方都市の空洞化が言われる現代ではむしろ、それを作り出す可能性が出てきたのかもしれない。かつて公共施設を郊外に移し、

<sup>15</sup> 参考、岡倉天心『茶の本』(大久保喬樹訳、KADOKAWA、2019年)では、「空虚が万物を内包する」(p.90)という道教の思想を援用して、「数寄屋」は「空き家」でもあり、虚の空間が無限に自由な可能性を秘めているとした。

<sup>16</sup> アントネッラ・アンニョリ『知の広場』(みすず書房、2011年)では、図書館を「屋根のある広場」ととらえ直す試みを紹介している。

<sup>17</sup> 猪谷知香『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房、2014年、p. 19

大型施設を建てるが多かったが、現代ではむしろ、徐々に町中に回帰している。県・市共同の図書館を中心とした複合施設である高知のオーテピアなども街のショッピングの中心地である帯屋町の一角に設置されていて、文化施設として機能している。

そうした広場的な「空」の空間では、目的志向性ではなく、偶発性やセレンディピティーが重視されることだろう。今までにない新しい発想や結びつきを生み出すには、従来型の目標設定や目的遂行では難しい。目標や目的を立てた時点でもう、従来の枠組みに捉えられているからだ。その意味では、その枠組み自体をもゆるくする場合こそ、創造的なのである。

以上、本章ではドイツの事例を中心に、読書振興の場として、多様な人びとの間の交流の場であり、かつ都市の「空」である、偶発的ながら恒常的な場の存在について考察してみた。

### 3、サードプレイスと読書会との親和性

次に、第一章で言及したサードプレイス論について、読書会との親和性を検討し、読書会がサードプレイスのな場所で行われることの意義について考察してみる。

サードプレイス(*The Third Place*)はアメリカの社会学者レイ・オルデンバーグの著書”*The Great Good Place*”(1989)内において、自宅を第1の場所(*The First Place*)、職場や学校を第2の場所(*The Second Place*)としたとき、そのどちらでもない第3の良い場所を指して用いられた語である。20世紀を通して、アメリカ社会における人間関係の希薄化に伴って、カフェや居酒屋といった「他者と関わる」環境は減少の一途をたどってきた。そうした場所の個人的、社会的意義を再評価し、生活を単なる自宅と職場の往復にとどまらず、「インフォーマルな公共生活」へのアクセシビリティを保証することで社会関係を円滑かつ創造的なものにしようというのが著者の論である。

サードプレイスの特徴について、オルデンバーグは次のようにまとめている。

サードプレイスは中立の領域に存在し、訪れる客たちの差別をなくして社会的平等の状態にする役目を果たす。こうした場所のなかでは、会話がおもな活動であるとともに、人柄や個性を披露し理解するための重要な手段となる。サードプレイスはあって当たり前のもと思われていて、その大半は目立たない。人はそれぞれ社会の公式な機関で多大な時間を費やさなければいけないので、サードプレイスは通常、就業時間外にも営業して

いる。サードプレイスの個性は、とりわけ常連客によって決まり、遊び心に満ちた雰囲気の特徴とする。他の領域で人びとが大真面目に関わっているのは対照的だ。家とは根本的に違うたぐいの環境とはいえ、サードプレイスは、精神的な心地よさと支えを与える点が、良い家庭に酷似している。(下線引用者)<sup>18</sup>

読書会について、オルデンバーグは具体的な言及をしていない。しかしサードプレイスに期待される要素のうちには、読書会においても求められる要素が多く存在する。例えば「社会的平等の状態」「中立の領域」の確保は、よりフラットで多様な対話を促すものである。具体例を挙げると、授業や課題において、教員の期待する読み方、考え方を過度に付度してしまう学生が、読書会のような環境ではより自由に感想や意見を展開できるかもしれない。また「会話が主な活動である」場においては、読書体験やそれに付随する意見を一人のものとして、多くの人と共有することが可能である。「遊び心に満ちた雰囲気」や「精神的な心地よさ」が保証されれば、「ためになる読書をしなくて」という思い込みから脱却する機会を得られるかもしれない。

またサードプレイスと読書会との共通点には次のような要素も考えられる。

「自分の時間でありながら常に他者が存在する」

生活の中に他者の意見が入ってくることを許容できるようになる。このことは意見交換型の読書会のみならず、自分の時間を過ごしつつも、他者の書いたものを読んでいる読書そのものとの親和性も高い。

「日常生活から切り離された空間を構成する」

変化のない日常から少しばかり離れたいという要求に、読書(会)、サードプレイスの両者とも応え得るものである。

「扱える範囲が広く、目的が単一でない」

サードプレイスが共通の大きな目的を持った人々の集合体でないのと同様に、読書会は「読書」という共通要素はあるものの、そこに参加する人々の目的は様々である。例えばスポーツの好きな人と芸術の好きな人とを、それぞれについて書かれた本を通じてひとところに集わせることが出来るのは、読書会の大

---

<sup>18</sup> オルデンバーグ、前掲書、p.97

きな特徴である。扱えるテーマの広さから、参加者にとっての敷居を低くすることが可能である。

このように、読書会を行う場所にサードプレイスの要素を考慮することは、読書会をより円滑で意義あるものにするに幾分か貢献し得ると考えられる。

サードプレイスの要素の一つでもある「自然発生的なコミュニティ」という点に関しては、意図して設立された読書会と異なっており、自然発生的なコミュニティの強みである流動性や持続可能性は読書会運営を考える上で議論すべき重要な課題である。しかし、オルデンバーグがサードプレイスの好例として挙げる各国のカフェや居酒屋は事実、文芸をはじめとして歴史上多くの文化発展、交流に寄与しており、そこにはクラブ、サロンをはじめとした多くの会合が存在していた。そのため少なくとも文化発展に関しては、サードプレイスとしての「場」の成熟と、そこに存在した文化コミュニティの発展とは不可分であるように思われる。

以上、本章ではサードプレイスと読書会との親和性について検討した。両者は十分に密接かつ相補的な関係にあり、読書会について論じる上でサードプレイス論を援用することが妥当であると結論付けた。

#### 4、読書の場としてのブックカフェの事例

前章まででは、読書振興における場の重要性、ならびに読書会とサードプレイス論との親和性を強調したが、本章ではそれを受けて、町中の創造的な読書の場をいかに作るかという問題について、徳島のブックカフェを事例に、店のマスターへのインタビューを交えて以下、考察してみる。

ウィアードカフェは、徳島でまちライブラリーを始めたブックカフェである。「まちライブラリー」というのは、みんなで作る図書館で、カフェやオフィス、個人宅、病院、お寺など、さまざまな場所に本棚を置き、メッセージ付きの本を配架し、交流の場を作るものだ。磯井純充氏が提唱者で、関西圏を中心に607カ所（2019年3月現在）を擁して活動している<sup>19</sup>。その多くは、既存の団体や施設が登録加入したもので、各所のまちライブラリーが登録費も会費も課されることなく、ゆるやかなネットワークを形成しているのが特徴である。

このまちライブラリーに加入したウィアードカフェには、読書好きの常連客

---

<sup>19</sup> 磯井純充「“まちライブラリー”を活用した地域場の場づくりに関する研究：『個』の活動が活かされる社会への道程」大阪府立大学博士学位論文、2020年 参照：  
<https://machi-library.org/> 最終閲覧日 2020年11月19日

が多くいる。店内の蔵書は折に触れてマスターが客に紹介している。また後述のように、筆者が主催するまちライブラリー・ビブリオラボとくしまの読書会定例会もここで開催している。筆者が学生たちをよく連れて行くので、学生達や読書会メンバーがカフェの常連となるケースもよくある。やがて、ここで読書会がなされていることが知られ、読書会参加希望者が現れるようになった。また筆者も常連なので、カフェでよく読書好きの客を紹介され、彼らと知り合いになる。大学の教員や学生が常連であるということも場の力になっているのかもしれない。読書することを目的に来る人はもともと多かったが、さらに読書の仲間を求めるという傾向も生まれているのである。客としてやってくる人たちとの出会いも、たまたま居合わせて、マスターに紹介されたから生まれるといった偶発的なものである。

偶発性や多様性は安定性・持続可能性とは相いれないところがある。だが一方で、創造性もある種の不安定さを前提としている。経済的豊かさが必ずしも文化的豊かさにつながるわけではない。持続可能な安定した文化を創ろうというのはそれ自体が矛盾なのかもしれない。むしろ不安定な要素を取り入れていく文化が活性化し、結果的には持続する。都市文化においては、パリやニューヨークといった文化的首都といわれる都市とはそういう異質な人々に寛容だったからそうなったのだが、それは不安定性・流動性という負の面を引き受けることと引きかえでもあったのだ。

したがって、不安定さと異質なものへの寛大さが文化的な場の前提であるとすれば、お金をかけて施設を整え、経済的な豊かさを保証することが必ずしも文化振興なのではない。むしろ様々な人が自由に入出入りし、どんな人でも受け入れられるという雰囲気を作ることが大切だろう。他方、持続可能性を追究するあまり、会員制による参加者の囲い込みとか、マニュアル化、流派の形成でそうしたクリエイティブな不安定さが損なわれることがある。同質集団化やセクト化、オタク化、集団の囲い込みが必ずしも創造的ではないゆえんである。

ウィアードカフェは2012年開業で、徳島市の駅前から15分ほどの住宅地の一角の川ぞいに位置し、2階建て家屋の2階にある50坪ほどの広さのカフェである。アルバイトは雇わずマスターが一人で経営しているので、客数は多くなく、一日十人程度の時もある。本棚五つとCD棚が二つあり、客が本とCDを閲覧できるようにしている。アンティークな小物も置き、落ち着いた雰囲気を醸し出している。四人がけと二人がけのテーブルがそれぞれ三台ある。

常連で週に一、二回定期的に本を読みにくる一人客が十人ほどいる。それも女性客が多いのが特徴だ。そうした常連客のなかには大学の研究員で、午後の

休み時間に来て本を読むことを習慣にしている人や、週一回、子どもの習いごととの送り迎えの間をここで読書して過ごす人、週末や仕事帰りに立ち寄って本を読んでいくサラリーマンなどがある。またマスターによると、本を読む常連客で、男性は自分の本を持ってきて読むのに対して、女性は店内の本棚を見て回りその中から本を選んで読んでいく傾向があるという。その際にはさらに、マスターにおすすめの本を紹介してもらって持ち帰って読む人と、その場で読むという人に分かれ、後者は二、三週間かけて一冊読みあげるといふ。こうした活動の背景として、マスターが本好きで、店内に本をたくさん置いてあることがある。その一方で、客が本を寄贈していくケースもあり、マスターにとっても自分がまず手に取らない本に触れる機会になるという。

このように、ウィアードカフェの読書の常連客は、読書する場としてここに通りマスターとの交流のなかで少なからず自分の読書の幅を広げることができているといえる<sup>20</sup>。マスターも「本は人を繋いでくれる」と筆者に語ってくれた。

一方で、セルフカフェで読書する人は、こうした自分が普通読まない本と出会うという経験はまず得られない。セルフカフェは異なる人・ものが交流する「広場」とは言えない。その意味で、ウィアードカフェというブックカフェは、マスターというよきカタリストと配架された多様な本の存在によって読書の交流の「広場」となっているのである。

## 5、ブックカフェにおける読書会の実践

読書を通じた場としてのウィアードカフェを紹介してきたが、それではこうしたブックカフェでは読書会の開催は可能なのだろうか。以下、筆者が主催するまちライブラリー・ビブリオラボとくしまの活動を中心に考察をすすめる。

ウィアードカフェでビブリオラボとくしまは、地域における読書振興と交流

---

<sup>20</sup> この点においては、磯井氏がまちライブラリーの利用者アンケートで考察したように、「不特定多数の人とのつながりを求めるというよりまちライブラリーのスタッフのようにその場におけるホスト役に期待しているところが大きい」（磯井、前掲書、p.97）ということが、ウィアードカフェにも当てはまる。ブックカフェにおける常連客の場合にとっても、不特定多数の人との出会いを求めているというより、マスターなどホスト役との交流があることと、一人で過ごすこととのほどよいバランスが心地よさの要因といえるのかもしれない。磯井氏はさらにこうも述べている、「1人で過ごせる空間でありながら特定の人とのつながりの両方を得られる場所としてまちライブラリーを捉えており、その居心地につながる」（同書）。ただ、「特定の人とのつながり」とはいえ、ウィアードカフェの事例のように、適当なカタリストの介在によっては、やはりそこから不特定の人々との交流にもつながる可能性は秘めているだろう。

の場作りを目的に、2017年から月一回定例で読書会を、2020年2月時点ですでに30回以上開催している。もともとは別のカフェで、2015年から開催していたが、そのカフェが閉店してからウィアードカフェで開催するようになった。10～15人の参加者があり、年齢層は10代から70代までと幅広い。会員制をとらず、主催者である筆者が個人的につながりのある人にメールで案内している。フェイスブックにも開催案内を載せることがあるが、毎回ではない。出欠確認もしないので、二、三回に一度とか、一年に一度というペースで参加する人もいる。毎回参加する人は四、五人にとどまる。店から場所代を要求されないが、その代わりに参加者にはウィアードカフェで1ドリンクを注文してもらうようにしている。

読書会のやり方は、推薦図書持ち寄り型で、あらかじめ設定したテーマに即した本を参加者が持ち寄り、順番にそれを紹介していくというやり方だ。会の冒頭で参加者が自己紹介・近況報告をして、その後、順番に本の紹介をしていく。紹介した後には他の人から質問やコメントがあり、自ずとブックトークになるが、ときには脱線して雑談になることもある。一人当たりの持ち時間は当初5分と決めていたが、いつしか守られなくなり、10～30分かかることになり、会全体も2時間の予定が、ほとんど毎回オーバーしてしまう。読書会は基本的には毎月第3土曜日の午後に開催している。店の営業に邪魔にならないように閉店時間前の最後の2時間になっているが、店にやって来て読書会を目にして立ち去る一般客もいる。読書会の開催日時の固定化と、開催周知でこうした事態は避けたいと考えている。最近ではウィアードカフェのお客が関心を持ち、参加するようになるケースも増えている。

参加者の反応としては、特に年配者は、異世代の人との交流が楽しいという。また30代女性は家庭・職場以外のつながりができてリフレッシュになるという。三歳の子供を連れてくる大学卒業生は、久しぶりに大学にもどれたようだと言って、常連になった。文学趣味の年配者も若い人の感性に触れられるよい機会になっているという。ただ学生の参加はだんだんと減ってきている。文学愛好会ではないのだが、文学好きの年配者がコア参加者になるにつれて、そうした色が付き、会の敷居が高くなることも一因だろう。実際、持ってきた本の作家や作品について延々と蘊蓄をかたむける人もいる。こうした状況に対して、運営上のルールを明確に示すことと、ファシリテーターの育成が今後の課題であると考えている。

以下、ウィアードカフェで開催したビブリオラボとくしまの例会（2018年5月～2019年11月）について、開催日時とテーマ、参加人数を一覧できるように

に示す。

表 2018-2019年の例会参加者内訳（人）

年	月	テーマ・内容	総数	男性	女性	学生	教職 員	社会 人
2018	5	課題図書型読書会	10	-	-	-	-	-
	6	歴史に関する本	11	-	-	-	-	-
	7	お預かり推薦本	10	7	3	2	3	5
	8	納涼読書会 2018	14	6	8	2	1	11
	9	居心地のいい場所	12	5	7	3	2	7
	10	映画化された本	7	3	4	1	2	4
	11	生き方に影響を与えた本	7	4	3	1	2	4
	12	東京に関する本	10	8	2	1	3	6
2019	1	子どものころ読んだ本	10	6	4	2	1	7
	2	ニッチな場所に関する本	10	6	4	2	3	5
	3	別れゆく人に贈る本	6	3	3	0	2	4
	4	平成を振り返る	11	8	3	3	1	7
	5	ひとはこのみの市	13	7	6	7	1	5
	6	文体の好きな本	10	6	4	2	1	7
	7	図書館・本屋に関する本	8	5	3	2	1	5
	8	納涼読書会 2019	12	8	4	1	1	10
	9	月に関する本	12	8	4	1	2	9
	10	weirdにある本	14	9	5	1	2	10
	11	雑誌	16	10	6	4	2	10
平均			11	6	4	2	2	7

以上のように、この期間の参加状況は、6～16人の参加人数で、参加者の世代も職業身分も多様であった。外国人（留学生や外国人在外研究者）の参加もあった。ウィアードカフェ以外で開催したときもあれば、また定例読書会と連動してウィアードカフェで古本市を開催したこともあった。読書会は推薦図書持ち寄り紹介型が基本だが、一度だけ課題図書型で小説を参加者全員が読んできて読書会をやることを試みたこともある。参加者の出入りは盛んで、風通しはよい。上記のように参加者の満足度は高いと思われるが、その一方で、ある時期まで常連だった人がいつしか参加しなくなることもよくある。転勤や卒業



などもあるが、それ以外の理由を聞き出すのは難しい。推測するに、読書会で取り上げるテーマが合わないことや、参加者間の相性がよくないことが考えられる。なかには、自分で読書会を立ち上げて巣立っていった人もいる。テーマ設定については、参加者の意向や希望をもとに決めているが、提案する者が限られてしまうため、自ずと偏りがでることは否めない。文学愛好会ではないとはいえ、文学好きが集まる傾向もある。

以上のことから、多様な人々の集まりの場となり、交流と知的刺激が生じる場としてこの読書会はある程度機能しているが、一方で、とすれば固定化し内容と参加者に偏りが生じがちであることがわかる。

これに対して、読書会という場だけではなく、その物理的な場であるウィアードカフェの存在自体が、読書会を流動性とより大きな交流へと開く可能性を秘めている。近頃では、ウィアードカフェに来る客から読書会参加希望者が現れ、新たに常連となるケースも出てきた。ウィアードカフェという場で培われた信頼感があって読書会への参加が容易になっているためであろう。また、読書会参加者がウィアードカフェの常連になるということもある。このように、絶えず人の出入りがあれば、会の多様性も維持できるし、一部の文学マニア色も薄められる。その結果、ブックカフェをハブ的広場として、読書会が半公共的なものとして活性化するという状況が自ずと生まれるだろう。こうした風通しのよさと場への信頼感が読書会における閉鎖性や固定化、偏りを相対化する役割を果たしているといえる。それゆえ、ウィアードカフェのようなブックカフェにおける読書会は偶発的であり、かつ恒常的な場となり、地域における読書振興につながりうるといえる。

## 6、おわりに

以上、本論は地域における読書振興の観点から、ブックカフェという場における読書会の可能性について考察してきた。新しいタイプの読書会が注目される近年、参加者の偏りや運営上の行き詰まりに対して読書振興のための交流型読書会に注目して、「広場」のような風通しのよい場の重要性を指摘した。また「サードプレイス」と読書会との親和性を考察した。そのうえで、ブックカフェという場における読書会開催がそうした偶発的かつ恒常的な場となり読書振興につながることを、徳島のウィアードカフェというブックカフェを事例にして、明らかにした。

読書振興活動において、場の存在は大きい。そうした場は、読書会などが開催される場であるとともに、それ以外でも立ち寄れる「広場」のような場であ

り、かつサードプレイス的な場であることが望ましいだろう。その点では、読書会や読書イベントよりブックカフェの存在自体が読書振興には効果的である。かつての文学カフェのように、そこにいけば誰かがいて刺激し合えるという関係があるということの方が、文化を涵養するには適している。むろん読書会において刺激を与えてもらえる人の存在は重要であるが、それ以上にその「場」自体が啓発的效果を有するのだ。イベントや定例会だけではそうした効果を期待するのは難しい。読書会では、数年でメンバーが固定化されマンネリを招くのが常であるし、目標設定されたセミナーでは尊敬すべき講師に接することはできるが、思いがけない出会いやセレンディピティーは生じにくい。それに対して、ブックカフェのような場では、個々人が主体的になりうるし、流動性が保たれ、偶発的な出会いや刺激も生じやすい。それゆえ、こうしたブックカフェでの読書会は地域における読書振興にとっても有効だろう。

ただブックカフェと読書振興の親和性の強さについては、さらに他の場との比較も必要である。公共スペースやコワーキングスペースではこうした効果が期待できないのかどうかはあらためて検討してみる必要がある。また、たまたまウィアードカフェはうまくいった事例だが、一般的にカフェと書店が合体したブックカフェが読書振興に有効であるかどうかにもさらに他の事例も取り入れて考察していく必要があるだろう。そもそも、ウィアードカフェのような本の販売はせず閲覧・貸し出しのみのブックカフェの存在は地方都市では希少である。こうした「場」をいかに作り、支援していくかについても考えるべきだろう。さらに、ブックカフェで開催するがゆえに、時間的制約や会の趣旨の周知不足、参加者の主体性の欠如に対して、上述のように、読書会の運営上のルール明確化や定例会の日程の固定化、ファシリテーターの育成も必要であると考える。これらの点については、今後の課題としたい。